

はしか門（ひしかもんことり） （左甚五郎作）

下新郷漆原医院には木造かわらぶきの古めかしい門があります。この門をくぐると、はしかがかかるくすむといわれ、ある時にはさい銭箱を置いたほどにぎわったそうです。また、この門扉の板きれを少し持ち帰り、はしか除け、盗難除けのお守りにしたり、煎じて薬にしたともいわれ、今でも門扉のあちこちに板きれを持ち帰ったあとの穴や裂目がたくさん残っています。

今から三百二十年ほど前の12月26日、大雪のため道にまよったみすぼらしい旅人が一夜の宿を頼みました。漆原家の主人は喜んで旅人を泊めてあげました。これが左甚五郎でした。彼は「お礼に残り木を使い刃物一挺で門を建ててあげよう。盗難除けと火難除けどちらがよいか。」と主人に聞きました。主人は「盗難除けを。」と希望して造ってもらったのがこの門なのです。ある時泥棒が漆原家に侵入しましたが、いざ門から出ようとすると、こわさで全身にふるえがきてどうしても出ることが出来ずひき返し、主人に両手をついてあやまり、とった物を返し「もう悪いことはし

ません。」との誓いをたて、腰の刀までおいて米と味噌をもらって立ち去ったということです。それ以来漆原家は、この門に守られて一度も泥棒に入られたことがないそうです。盗難除けの門が、いつごろからはしか門といわれるようになったのかは不明ですが「当時はしかは命さだめといわれていたからではないでしょうか」と漆原家ではいっています。近くの大光院には左甚五郎が使ったといわれる黒ぬりのお膳があつたそうです。

※左甚五郎：江戸時代初期の建築彫刻の名人で日光のねむり猫などが有名でありその他多くの逸話で知られている。

